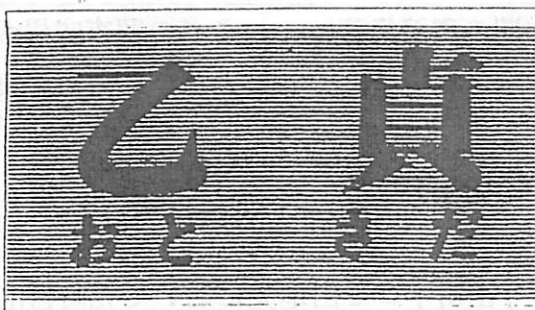




第74号 通巻14巻第1

1994年5月31日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

☎ (0775) 85-4397

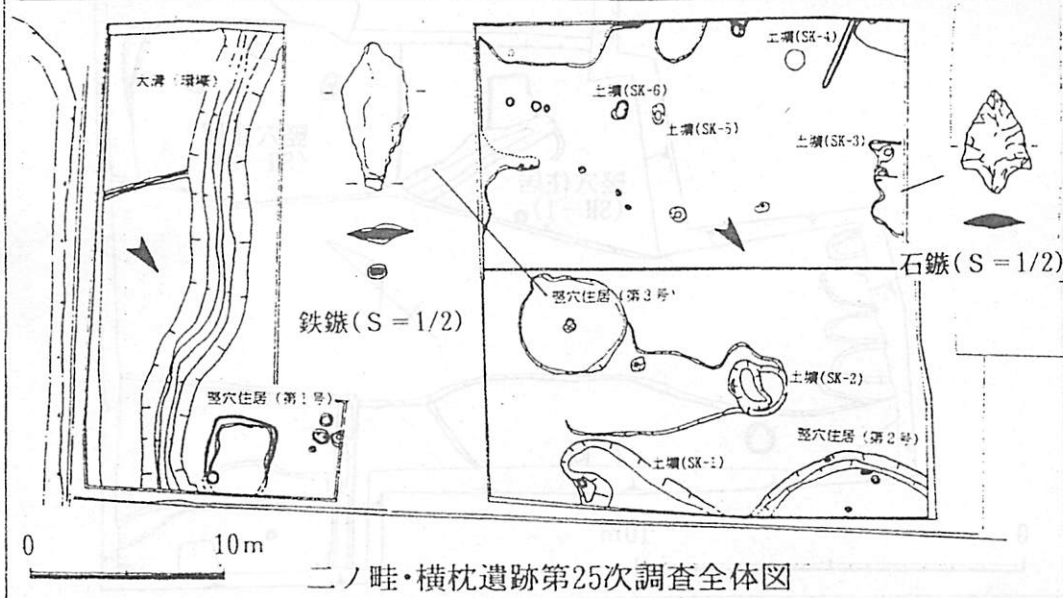
〒 524-02

守山市服部町2250番地

## 弥生時代の環濠集落の調査

### 1. 二ノ畦・横枕遺跡第25次調査

守山市商工会館の北東約 100mの地点で行っていた、共同住宅建築に先立つ発掘調査は4月末で終了しました。調査の結果、現地表面の50cm下から弥生時代中期末と古墳時代後期の遺構がみつかりました。弥生時代の遺構には環濠<sup>かんごう</sup>と考えられる大溝や竪穴住居3棟（方形住居1棟、円形住居2棟）、それに土壌があります。竪穴住居からは多量の弥生土器が出土した他、県内では最古級の鉄鏃<sup>てつそく</sup>（鉄のやじり）と用途がわからない鉄製品もみつっています。また、土壌からは同じ時期の打製石鏃<sup>だせいせきそく</sup>も出土していることから、このムラの間人が石の道具と鉄の道具の両方を使っていたことがわかります。大溝は幅3.4m、深さ1.6mの規模で、地面をV字形に掘り込んでいます。溝の方向は北東から南西に向けてのびており、野洲町側で発見されている2条の大溝の内側の溝につながるのではないかと考えられま



す。二ノ畦・横枕遺跡の弥生時代中期の環濠集落はこれまでの調査成果から、直径が 550mを越えるものと推定され、全国でも最大クラスの環濠集落であるといえます。

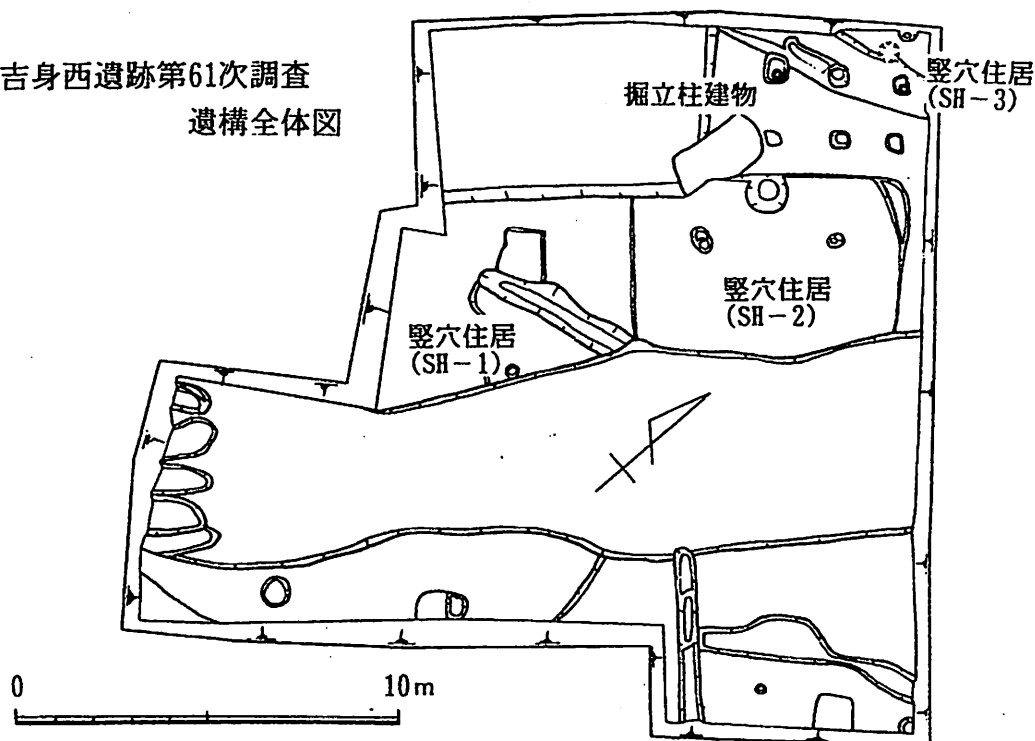
## 古墳時代の集落遺跡の調査

### 2. 吉身西遺跡第61次調査

4月25日から5月9日にかけて、守山町字コモ田地先において元町自治会館建築に先立ち発掘調査を行いました。面積約200㎡を対象に調査をした結果、古墳時代中期の竪穴住居3棟と古墳時代後期と考えられる掘立柱建物が1棟、それに溝が多数見つかりました。竪穴住居はいずれも溝と重複していて全体のはっきりしたものはありませんでしたが、SH-2だけ一辺が約7.1mと推定することができました。しかし、この住居も屋根を支える柱穴が2ヶ所みつかった以外内部は不明瞭でした。また、掘立柱建物は現状で2間×2間（面積約10㎡）の規模で、柱の配置から高床倉庫ではないかと考えられます。

今回の調査地点では、田んぼの土を取り除くとすぐに砂礫層（石はこぶし大の大きさ）があらわれ、数千年以上前には野洲川が流れていたのではないかと考えられる様子がみられました。

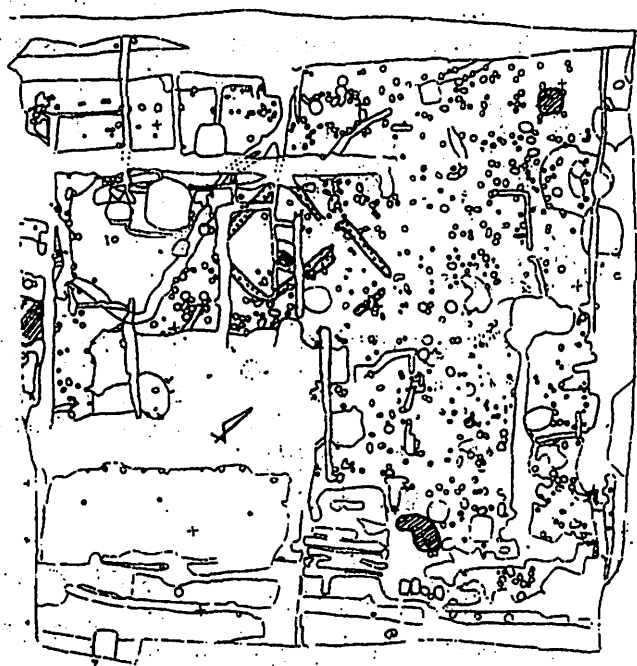
吉身西遺跡第61次調査  
遺構全体図



## ① 調査中 ①

### 3. 欲賀遺跡

欲賀地区ほ場整備事業に伴う発掘調査は今年度で3年目に入り、4月13日から調査を再開しています。現在調査中のD-2地区からは中世の大小の溝と土壌、そして700穴にもおよぶピットがみつかっています。土壌の中には五輪塔の『空輪』の部分が露出したものがいくつかあり、前号で報告したD地区からさらに中世の墓域が広がることがわかりました。五輪塔が出土した土壌には炭や焼土を伴うものや「塚墓」と呼ばれる溝で四角く囲まれたものがあり、いくつかのタイプの墓が造営されていたことが考えられます。

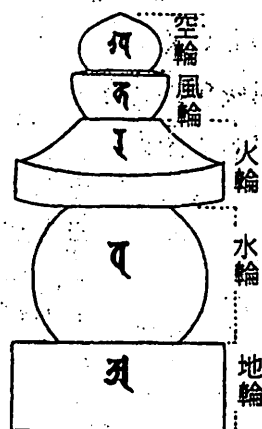


- 区画墓の溝
- 五輪塔出土の土壌

欲賀遺跡D-2地区遺構全体図

### 4. 吉身西遺跡第60次調査

目田川改修工事に先立ち、約1800㎡を対象に平成5年度から継続して調査を進めています。現在は旧河道の最下層を掘削しています。最下層からは弥生時代後期の土壌が検出され、弥生時代後期以降に川が埋没したと



五輪塔部分名称

がわかりました。旧河道は古墳時代前期頃に一気に埋没しており、砂を含む遺物包含層が厚く堆積していました。この土層内には土師器のほか木器が大量に含まれていました。木器には下駄や木槌、槽(容器)などがあり、古墳時代前期の暮らしを知るうえで貴重な資料といえます。

調査はさらに東側に進む予定ですが、集落の様子が今後の調査によって判明すると予想されます。

#### 5. ハノ坪遺跡

昨年12月に着手したハノ坪遺跡の発掘調査は4月13日から再開しています。今年度は約7500㎡を調査する予定ですが、すでに1調査区を調査し終えて、昨年調査地でみつかった旧河道の延長を検出しました。

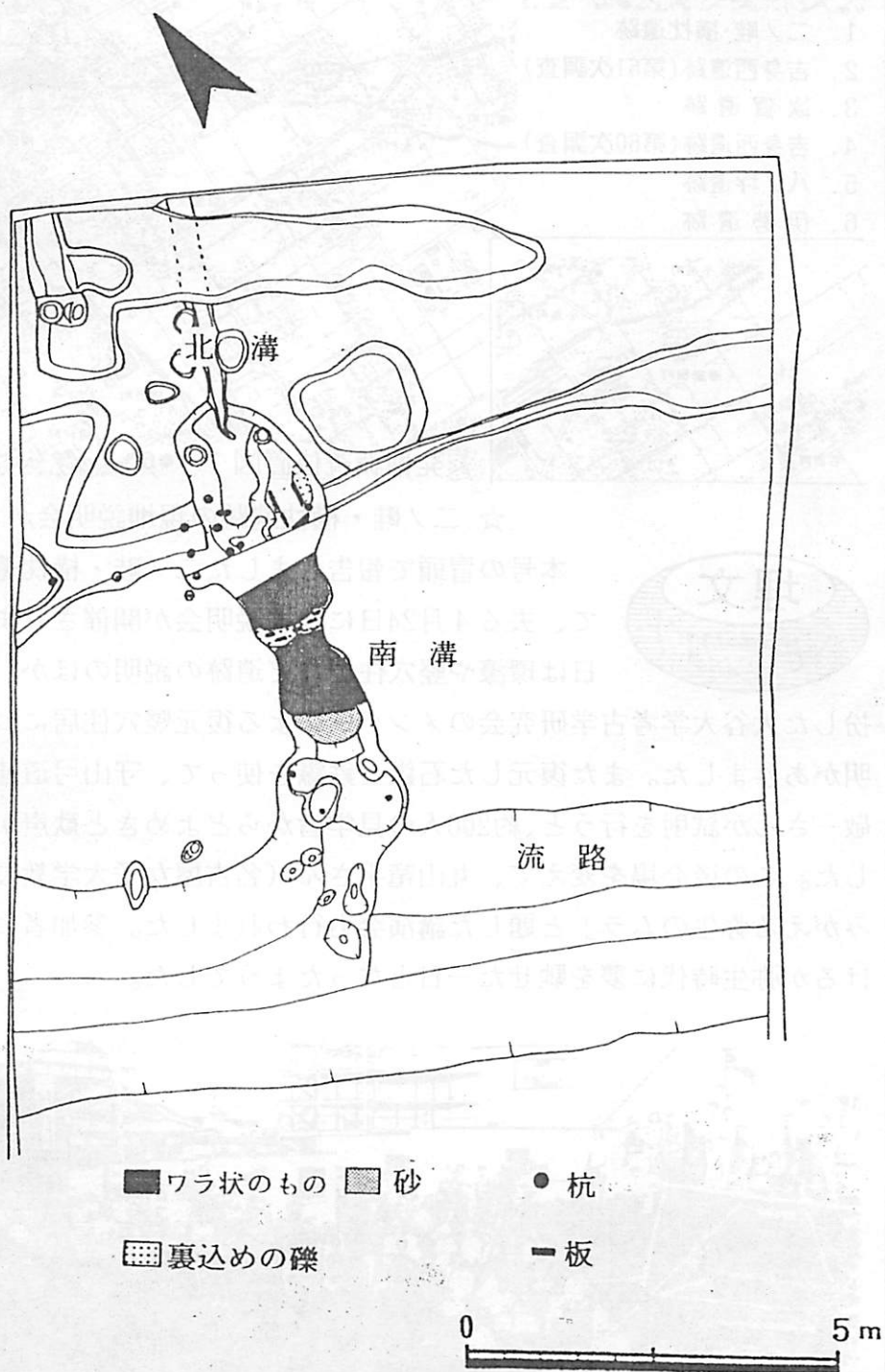
旧河道は幅約5m、深さ約1.5mの規模で、まさに蛇行と表現するにふさわしいくらいジグザグに曲がりくねっており、上層に褐色の粘土、下層に黒灰色のこまかい砂、そして底には粗い砂が堆積していました。遺物は下層から木器が、底の粗い砂からは多量の土師器が出土しています。木器や土器の年代は古墳時代前期頃と考えられ、いずれも保存状態がよいことからその製作技法を知るうえで貴重な資料です。

旧河道の出土遺物の多さから、古墳時代前期の大規模な集落がこの近辺に営まれていたことは確実と考えられますが、今のところ4棟の掘立柱建物を検出するだけです。これからの調査では、旧河道から出土する木器や土器を使っていた集落を明らかにしたいと思います。

#### 6. 伊勢遺跡 (28次)

伊勢町地先で土地区画整理に伴う発掘調査を4月14日から再開しています。現在までに弥生時代後期から古墳時代にかけての溝や流路、それに鎌倉時代の掘立柱建物や井戸、溝などがみつかっています。流路は幅3~4m、深さ1~1.4mの規模で、伊勢遺跡が立地する微高地<sup>びこうち</sup>の南端近くを西方向にほぼ真っすぐ流れていたようです。この流路にとりつくかたちで南北方向の溝が1条検出されています。この溝は幅30cm程の北溝と幅80cm~1.6mの南溝に分かれており、出土状況から北溝から流れ込んだ水をいったん南溝に溜て、流路に流していたように考えられます。南溝には杭や板が打ち込まれており、状況から4つのブロックに分かれているようです。このうち中央2つのブロックにはワラのようなものが丁寧に敷き詰められてい

ました。この溝の年代は出土遺物が少なく明確ではありませんが、溝がとりつく流路の底に堆積した砂の中からは弥生時代後期の土器が出土しています。



伊勢遺跡Q区遺構概略図



1. ニノ畦・横枕遺跡
2. 吉身西遺跡(第61次調査)
3. 欲賀遺跡
4. 吉身西遺跡(第60次調査)
5. ハノ坪遺跡
6. 伊勢遺跡

☆ ニノ畦・横枕遺跡の現地説明会から ☆



本号の冒頭で報告しましたニノ畦・横枕遺跡において、去る4月24日に現地説明会が開催されました。当日は環濠や竪穴住居など遺跡の説明のほか、弥生人に扮した大谷大学考古学研究会のメンバーによる復元竪穴住居についての説明がありました。また復元した石鏃と鉄鏃を使って、守山弓道連盟の督永敬一さんが試射を行うと、約200人の見学者からどよめきと歓声がおこりました。この後会場を変えて、丸山竜平さん（名古屋女子大学教授）の「よみがえる弥生のムラ」と題した講演会も行われました。参加者にとっては、はるか弥生時代に夢を馳せた一日となったようでした。



ニノ畦・横枕遺跡現地説明会風景